

解けない問い

第3期 OG 杉山 摩美
(旧姓：小出)

小野ゼミに入ったのが2003年、卒業し就職したのが2005年、わりとあっさりと転職したのが2007年、結婚したのが2008年、息子が生まれたのが2011年。その息子ももうすぐ3歳。

この10年で、生活環境はもちろん、モノの見方も、人との付き合い方も、仕事への姿勢も、ずいぶんと変わってきました。リニアな“スキルアップ”なんてあるはずもなく、年を重ねるごとに、自分がいかに無知であるか、モノを知らずに発言してきたかを痛感し、ひとつひとつのことに慎重に丁寧に向き合うようになった気がします。つまり、「できるようになった」ことより「できないことを自覚した」ことの方が多い。それはそれでいいことだ、と自分では思っています。

その「できないこと」のひとつに「人と上手に話すこと」があると最近気づきました。いや、薄々感づいていたのですが、「人と上手に話すこと」はあくまで不得手なのであって、克服可能なものだと思っていたのです（小野ゼミ生には「あんなにズケズケと物を言うくせに何を言うか」と思われるかもしれませんが）。



今年度4月、ゼミに来訪して講演を行った著者



先生と著者

学生時代、小野ゼミ時代、就職してからと、考えてみれば、ずっと同じような環境で生まれ育った人たちとコミュニケーションをとりながら生きてきました。生まれ育ちが似ている、というのは、共通言語を持っている、ということですから、別段苦勞しなくても「分かり合える」関係になることができました。



著者の御息子

ですが今、保育園の親同士の付き合い（これは失敗すると息子に迷惑がかかるので相当難しい）、肩書きを離れたところでの活動（国立の「つくし文具店」で店番をしながら“ちいさなデザイン教室”に参加しています）などに苦勞するなかで、「共通言語を持たないコミュニティでのコミュニケーション」がいかに難しいか、を身にしみて感じています。そこで、ああ、私は相手との距離感を天性で測り取れる人間ではないのだ、と気づいたわけです。

以前誰かに聞いた、こんなエピソードがあります。

あるコピーライターが打合せに参加していて、その打合せ中一言も意見を言わず座っていただけだった。それに気づいたディレクターが「おまえは何のために座ってるんだ！しゃべれねーのか！」と怒鳴りつけた。その場に同席していたコピーラ

イターの上司が「こいつは上手くしゃべれねーから、コピーライターをやってるんだ！」と応戦した。

苦手だからこそ興味がある。何も考えずにできるようなタイプではないから、人よりもうんと考える。私がずっと「コミュニケーション」に興味があり、それを仕事にしていらえることを幸運だと思えるのは、コミュニケーションが苦手だからなんだろうと思います。私にとって永遠の謎、ってことです。だから考えがいがある。

これから1番の課題は、子どもとのコミュニケーションになっていこうと思います。

これこそ、私、いや、人類全体の課題。解けない問いは面白い。



著者の御息子